



失った自然・手にした生活の便宜 ——川と沢の水からペットボトルの水へ(メキシコ)——

黒田悦子(文化人類学者 国立民族学博物館名誉教授)

2001年の統計によると、メキシコの人口は1億を超えた。そして、1930年代に農業人口は70%ほどであったのに、2000年には25%強に減少した。これらの数字は多くのことを語っているが、私が近年のメキシコに感じていた「自然らしさ」の減少にも関連がある数字と思える。

1970年代の初め、メキシコシティからプエブラ州にバスで旅した時、周囲の豊かな緑に安堵感を覚えた。その折、見物したウェホツィンゴやカルパンの教会も自然の中に収まっていた。2001年、再び同じ地方を巡ったところ、史跡はきれいに残されていたが、周囲の環境は落ちていた。その場で私は奈良の法隆寺を思い出した。寺は見事であるが、周囲は乱開発にさらされていた。現在、世界中で起こっていることは似すぎている。

メキシコ南部のオアハカ州の州都オアハカ市と高地ミヘ地域(州の北東部に位置する)は私の関わりの深い所であるが、ここでも自然の良さは減り、引き換えに手にした生活の便宜が幅を利かせている。それは諸々の現象に見受けられるが、端的には飲み物に現われている。

高地ミヘの人々は水といえば川と沢の水に頼って生活してきた。女の人がバケツで家まで運んできていた。1970年代に、大きな沢から水をホースで家の庭先にまで引き込む生活改善運動が国立先住民庁の指導により広まり、村人の生活は楽になった。これは安全な水らしかったが、万一のことを考えて私は飲まず、熱いコーヒーを専ら飲んでた。住んでいた村から他の村に行く山道では沢の湧き水を飲んだ。その美味しさは格別であった。野の花を見ながら手ですくって飲むその瞬間は至福の時であった。

コーヒーは1930年代から中部ミヘの村々で栽培され、高地に運ばれるようになった。豆を炒って粉にし、砂糖をいれて煮立てて飲むのがミヘ流で、甘いけれども、マイルドな味である。1960年代までは贅沢品だったらしい。しかし、1970年代には盆地部のサポテカ商人がラバのキャラバンで運んでくる瓶入りコカコーラがより上等の飲み物となった。霧の立つ寒い日にコーラを出されると、丁寧に断ってコーヒーと替えてもらうのに一苦労した。

1990年代になると、村の生活は変化を遂げてしまった。道路も電気も辺境の村々まで入り、消費生活も向上した。村の外れのゴミの集積場にゴミが目立ってきた。缶詰の缶が捨てられ、ビニール袋が風に飛ばされて沢の方まで落ちていた。村役場の清掃係が努力しても始末できない量であった。

知人の司祭が「もう沢や川の水は飲まない方が良い」と忠告してくれた。1970年代に導入された「溜め肥え式トイレ」に代わって家庭に設置された「近代的トイレ」が問題の根源であった。これは一見したところ水洗トイレであるが、バケツに貯め置いた水を便器に流し込むのであって、本当のフラッシュトイレではない。そして、下水道が完備しているわけではないので、汚水は家の周囲の地面に染み込み、ひいては沢や川の水も汚れてくる。

そんなわけで、私は相変わらずコーヒーだけを飲んでた。ところが、ここにもネスカフェなるインスタント・コーヒーが姿を現し、一部の人はそちらを選んでいる。それに、村のレストランではペットボトル入りの水さえ売っている。

オアハカ市へと旅する青年たちはペットボトル入りの水を荷物に入れている。その中身は沢の水であることもある。「エコロジカル」という言葉が流布し、ペットボトル入りの水を持ち歩いていることが流行なのである。オアハカ市で私が定宿にしているホテルには無料の「浄化された水」が薄青色のガラスの大瓶に入れて廊下に置いてあるが、これは危ない水だと外国人の間で言われてきた。ホテルの女主人はどの水も怪しいと苦笑する。有料のペットボトル入りの水は売れすぎて、急ごしらえで製造されていて、必ずしも安全ではない、と言うのである。マダムの近親者はこれを商売にしてテワンテベック近辺で大儲けをしているのに、この意見なのである。

自然を維持するのも自然を創るのも、なかなか難しい。

